

熊大通信

Kumamoto University
Campus Magazine
vol.92 2024 SPRING



白馬
スカイウォーカー
熊本県立美術館

【特集Ⅰ】

感性と発想が躍動する

KUMADAI ART思考

【特集Ⅱ】

超異分野de熊大イグニッション
～魔女狩りからビッグバンまで～

熊本大学「音楽ホール」

ご利用申し込みが
スタートしました!

音楽ホールの詳細はこちら



熊本大学広報誌

熊大通信

Kumamoto University
Campus Magazine
vol.92 2024 SPRING

- 02 未来を拓くSDGs 新たな芸術・文化発信拠点が発進奏でる。
- 03 特集I 感性と発想が躍動する KUMADAI ART思考
- 11 特集II 超異分野de熊大イグニッション ~魔女狩りからビッグバンまで~
- 15 知のseeds しなやかな社会基盤を創造し、自然災害に強いまちをつくる
- 17 卒業生ジャーナル
- 19 未来への羅針盤
- 20 KUMADAI TOPICS
- 22 熊本大学基金よりお知らせ
- 23 キャンパス 創造する森 時の小道
ミュージアム散策

[発行] 国立大学法人 熊本大学
〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1
【総務部総務課広報戦略室】
Tel.096-342-3119 Fax.096-342-3110
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

[編集] 熊大通信編集委員会
首藤 剛 / 委員長 広報担当副理事
(大学院生命科学部(薬学系)准教授)
宮尾千加子 / 理事(非常勤) / 広報・ブランディング・行政連携担当
松岡 浩史 / 大学院人文社会科学部(文学系)准教授
松永 拓己 / 大学院教育学研究科美術科教育 教授
濱田 絵美 / 大学院人文社会科学部(法学系)准教授
小出 眞路 / 大学院先端科学研究部(理学系)教授
皆川 朋子 / 大学院先端科学研究部(工学系)准教授
中村 五月 / 大学院生命科学部(保健学系)准教授
倉内 祐樹 / 大学院生命科学部(薬学系)准教授
濱洲 里美 / 総務部総務課副課長(広報戦略室長)

[制作] 株式会社カラーズプランニング

*取材にあたっては、基本的な感染防止策をとった上で実施しています。
*記載の職名・学年等は、取材時のものです。



未来を拓くSDGs

熊本大学では、教育学部音楽棟を改修し、新たに音楽ホールをオープンしました。大学院教育学研究科音楽科教育講座の

山崎 浩隆教授によると、音楽ホールの建設は音楽教育に携わる教員たちにとって念願だったとのこと。「このホールが、人や地域、音楽をはじめとした芸術をつなぎ、日々交流する場になってほしいと思います。また、学生にとっては、発表の場として、あるいは音楽科の教員として教育の現場に立ったときにイベントを企画・運営するよいトレーニングの場でもあります」。

真新しいホールには県産材が使われ、爽やかで心地よい木の香りに包まれます。「一番のこだわりは、なんといっても音響です。存分に音を楽しめる空間に仕上げました。本格的なホールの音の響きをぜひ体感してもらいたいですね。」と中原 雅彦准教授。「照明や座席の色、座ったときの触覚などにもこだわりました。」と山田 高誌准教授が続けます。さらに、映画館並みの8Kプロジェクターや音響ミキサーを備えた配信システムを完備。音楽の専門家たちがこだわり抜いたホールが誕生しました。

今回の音楽ホール完成を記念し、2023年9月にはオープニングコンサート「中原雅彦テノールリサイタル」と「学生・附属学校生徒・教職員によるガラ・コンサート(祝賀音楽会)」を開催。ガラ・コンサートでは、最後に来場者が一体となって演奏を楽しみ、まさに大学発の芸術文化の発信拠点を体現。翌月10月には、学内外の有識者を招いた公開シンポジウム「大学におけるアートの空間」を行い、新たなアート発信・交流拠点としてこの音楽ホールを活用するアイデアなどが、熱く語られました。

「70名ほどの座席数で、音楽教室の発表会やコンサートを行うにはちょうどよいホールだと思います。このような規模の音楽ホールは、熊本にはあまりありません。音楽関係のイベントに限らず、映画祭や展示会など、自由な発想で卒業生や地域の皆さんにぜひ活用してほしいです。」と山崎教授は語ります。

熊本大学の新たな芸術・文化発信拠点「音楽ホール」がいよいよ発進します。

奏でる。

新たな芸術・文化発信拠点が発進

音楽ホールに集まった音楽科教育講座の教員たち。18世紀のイタリア・オペラ史などを研究する山田准教授は、当時にタイムスリップしたような衣装で登場。

大学院人文社会科学部(文学系) / 音楽学
山田 高誌 准教授
Takashi YAMADA

オペラ、劇場を楽譜や史料などから多角的に研究。楽譜校訂を通じて作品にかけての新しい音楽表現について研究。「中学時代、チマローザの歌劇『秘密の結婚』を聞いてナポリ行きを決意! 音楽家のきっかけとなった一曲です。」
※復活蘇演……長く埋もれてしまっていた作品を演奏し蘇らせること。

大学院教育学研究科
音楽科教育講座 / 作曲・ピアノ
稲森 安太己 特任准教授
Yasutaki INAMORI

2023年4月から新たに着任。専門は作曲。主に20世紀後半から現代にかけての新しい音楽表現について研究。作曲を始めたきっかけは、ドビュッシー「アラバスク第一番」。「新しい音楽表現は若い世代から生まれます。次世代の新たな価値観を創る学生たちの教育に携わるのは楽しいです」。

大学院教育学研究科
音楽科教育講座 / 音楽教育
山崎 浩隆 教授
Hirota YAMASAKI

専門は音楽教育。小学校に25年間勤め、大学教員の道へ。一人でも多くの子どもに音楽を好きになってもらえるように、楽しい授業ができる教師を育てることが目標。入学式・卒業式で演奏する「熊本大学フィルハーモニーオーケストラ」の顧問も務める。ホルスト「惑星」が音楽を好きになったきっかけの曲。

大学院教育学研究科
音楽科教育講座 / 声楽
中原 雅彦 准教授
Masahiko NAKAHARA

専門は声楽。デビュー作となったヴェルディの歌劇『椿姫』は、声楽の勉強に役立つ好例とのこと。「私にとって音楽はいまや好き嫌いを越えた、あるのが当たり前存在。音楽道ともいえる境地です。将来、教育現場に立つ学生たちには、このホールの響きを体感して子どもたちに伝え、ぜひ一緒にステージに立ってほしいですね」。



音楽ホール完成記念コンサート・公開シンポジウムは、『熊大通信』91号20ページでも紹介しています!

【特集I】Special Feature

感性と発想が
躍動する

KUMADAI

ART

思考

“アート”とは何か？ おそらく、多くの人は、
絵画、彫刻、建築などの芸術作品を思い浮かべるのではないのでしょうか。
しかし、答えがない問題を考え抜き、
自分なりの答えをつくっていくことが求められつつある今の時代、
もっと広い意味での“アート”が注目されています。
本特集では、ユニークな発想や行動力で活躍する
熊本大学の研究者や学生たちにフォーカス。
一人ひとりのアクティブな感性が描き出す
KUMADAI ART思考の魅力をご紹介します。



重要文化財五高記念館をライトアップして
行うサンセットJAZZライブを企画。モダン
ジャズ研究会が奏でる音楽が「第十二回紫
熊祭」の初日を彩った。

松永教授の作品
『かたとき 花と踊
るII』。「肥後の里
山ギャラリー」で
行われた「熊本大
学 アートギャラ
リーサテライト展
Vol.2」で県内の芸
術家たち、学生た
ちの作品とともに
展示された。



アートが魅せる 冒険と感動を生む力

誰がアーティストなのか

アートには社会を変える力があります。アートに触れた、一人ひとりのその場での感動はごく小さなものかもしれませんが。しかし、社会を人々の縦と横の関係、網目のようなものと捉えるならば、その小さな動きはやがて大きな波となり、あるとき、より新しい、魅力的な社会が姿を現します。私はそう信じて日々活動しています。

“アート”という言葉の本来の意味は、“人の営み”を指します。つまり、誰もが日々アーティストとして生き、自らに、そして周囲の人々にも感動をもたらすことができるのです。私が専門とする油絵のように、白いキャンバス、つまり自分自身に何を描き、どのような色を重ねていくのかは自由です。アートは、私たちの考え方や行動に大きな力を与え、素晴らしい冒険をさせてくれる恰好のスタイルなのです。

眠っている宝物たちに もっと触れてもらう

熊本大学には、素敵なものがまだまだたくさん眠っています。例えば、この春の季節、午後5時頃に西日がかかるサインカーブや附属図書館のガラスが反射して

描くさまざまな色や模様的美しさ、この大学と同じ時を歩み歴史が宿る樹木たちや建物群は、とても綺麗で私が好きな風景です。このような素敵な宝物たちにもっと触れてもらうため、私たちは「熊本大学キャンパスミュージアム構想」で、さまざまな取り組みやイベントを行っています。熊本大学を訪れる誰もがワクワクし、学びたいと感じる場にしたいのです。

さらに、書店「TSUTAYA BOOKSTORE 菊陽」がまるで美術館のように姿を変え、本と絵画の融合を楽しめる作品展示会や下田温泉「望洋閣」での壁画制作など、キャンパスを飛び出して、さまざまな人と関わりながら、アートの力を伝える活動を日々行っています。

アート思考が描く冒険の旅へ

ここまでアートの魅力と私の活動をお話しましたが、いよいよ次のページから、アート思考で活躍する、熊本大学の研究者や学生たちが続々と登場します。皆さん、ぜひこのアート思考の旅をお楽しみください。そして、この旅の後、「アート思考って結構いいかも。少しやってみようか」と皆さんに感じてもらえるならば、これほどうれしいことはありません。

大学院教育学研究科
キャンパスミュージアム担当学長特別補佐
松永 拓己 教授
Takumi MATSUNAGA



昨年3月に開催した「熊本大学 松永研究室会展」。
「TSUTAYA BOOKSTORE 菊陽」の各所に絵が展示
され、本と絵が織りなす空間を楽しめる。



下田温泉「望洋閣」
に壁画アートが誕
生！学生たちの感
性で地域の魅力を
発見・発信する。



「肥後の里山ギャ
ラリー」でジャズラ
イブを開催。絵画
×音楽の新たな空
間を演出。

本紙20ページで、日比野克彦氏（東京藝術
大学長・熊本市現代美術館館長）を招いた
講演会の様子を紹介しています。



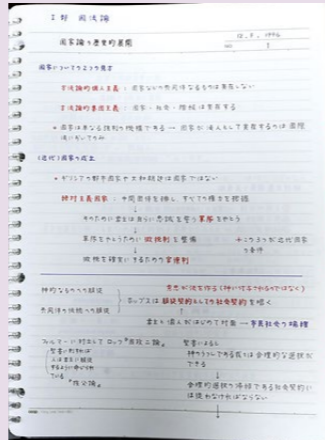
大学院人文社会科学部
法学部長

大日方 信春 教授
Nobuharu OBINATA



大学院時代に、英米の規範的正義論の旗手、ジョン・ロールズの「正義論」について研究。その成果をまとめた「ロールズの憲法哲学」(有信堂高文社、2001年)など著書も多い。

手書きで美しくまとめられたノート。学生時代に書いた1996年の研究の成果がまるで今日書かれたかのように大切に保管されている。このノートを基に恩師の著作の補訂を目指している。



自分のリズムと習慣で心地よく

私にはいくつか続けていることがあります。例えば、毎朝5:00頃に起きて出勤し、SNSのXに出勤報告、午前中のうちに大切な仕事を済ませます。午後は次々と舞込む仕事を進めながら、スポーツジムで走り、サウナで汗を流します。それから学者になってから「トミカ」を20年以上集め、毎月新車の発売日には購入しています。これら一つひとつに大きな意味や意図はありません。早起きも自分に合っているからだし、走るのはスッキリするから、トミカは昔から働く車が好きだったからです。専門の憲法学とどうつながるのか、私にも上手く説明できません(笑)。でも、研究もコレクションも続けていたら結構充実したものになりました。

自分の研究もしながら法学部長もやっています、われながら、なかなか多忙ではないかと思っていますが(笑)、自分に合った習慣があるからこそ、しっかり、心地よく研究を深められていると思います。

線虫×植物研究で、農業分野にイノベーションをおこす

主に動物、特に線虫と植物の相互作用について研究しています。線虫は1億種類以上、世界の動物の1/3以上を占めるとも言われています。私は、その中でもネコブセンチュウに注目しています。線虫による農業被害は年間数十兆円にも上ると言われていて、これを燻蒸剤などによらず、駆除することで、よりサステナブルな農業が実現できないかと考えています。

異分野コラボは新たな研究分野を生み出す原動力

先ほどのネコブセンチュウと農業被害のこともそうですが、私が他の人と圧倒的

に違うと感じているのは、全然違う分野の人と共同研究することが好きだということです。建築や考古学、薬学専門の人たちとコラボレーションすると、全く新しい視点からの意見や提案をもたらしてくれます。私のような基礎研究を行う生物学者は研究の応用や実用化までなかなか手が回らないという人もいますが、私は楽しんでます(笑)

例えば建築とのコラボは、5年間で億単位の研究費が配分される大型プロジェクトだったのですが、このコラボで、植物の茎の丈夫さには維管束組織が重要で、その構造が建築に生かせるのではないかなど、研究成果が生まれました。今、建築学会には植物のセッションができていますよ!

こんなにコラボを楽しめるのは、私が好



大学院先端科学研究部
生物環境農学国際研究センター長

澤 進一郎 教授
Shinichiro SAWA

積極的に コラボレーション してユニークに動く



植物に寄生して農業被害を及ぼすネコブセンチュウ。



「料理は、研究を行う感覚に近い」という澤教授。シェフとして食材や調味料の配合、盛り付けなどを考え探究する、奥深くクリエイティブな作業。



父の蘭研究を引き継いで研究中。

柔らかさと自分のリズムで 専門分野を探究する

憲法原理論からの華麗なる転身

私は憲法研究を専門にしています。それは「国の最高法規である日本国憲法自体の正当性の基礎づけ、つまり、憲法より下位の法律や命令を正当化する憲法自体が、何によって正当化されるのか」という疑問、いわば哲学的基礎づけの探究からはじまりました。

ジョン・ロールズの正義論を中心にこの研究を進め、大学教員のポストを得た頃、一つの興味深い新聞記事を目にしました。「ミッキーマウス“延命”」(2003年1月17日読売新聞)の記事です。アメリカで著作権期間を20年間延長する法律に合憲判決が下されたことを伝えるものでした。著作権を保護すること、それは表現の自由を制約することにもなると気付きました。「よいこと」とされていることを疑うという私の憲法に関する探究に通じるものを感じました。

また当時、憲法学の観点からこのテーマを取り上げる研究者はほとんどいません

した。そこで私は憲法原理論から華麗なる転身(?)をして、「著作権と表現の自由の問題」に関する体系的な研究を進めています。憲法学者でこのようなテーマを論ずる研究者はあまりいないかもしれません(笑)

柔らかさを大切に

大学で法学の授業を行う際には、まず一旦思考をリセットしてもらうことを大切にしています。例えば、学校で「これは弱者保護の法律であり素晴らしい」と習ったとすれば、それを疑う人は少ないと思います。しかし、「そもそも弱者とは誰なのか」、「本当に弱者保護のための法律になっているのだろうか」と問いを深めることで、他のものがみえてきます。

他には、民主主義や選挙に関して出前講座などで高校生に考えてもらうことも多いです。「そもそも」や「本当にそうだろうか」という視点でぜひ柔らかく考えてほしいと思います。

きな料理が関係しているかもしれません。この調味料を試してみようとか、この食材たちを合わせたら美味しいんじゃないかと考えて手を動かすのが楽しくて、異分野コラボに通じるものがあると感じています。研究室にも調理器具を置いていて、よく昼食を作って食べているんですよ(笑)

子どもの頃の体験が今につながる

今でこそ植物学の分野で少し注目してもらっていますが、昔からそんなに学校の成績は良くありませんでした。めったに落ちない大学院の試験に2回も落ちたんです(笑)。それでも受け続けたのは、父が研究者だったのも大きいかもしれません。父は蘭の分類の研究をしていました。

子どもの頃は、よく父のラボに行って、そこにいる学生たちに遊んでもらいましたし、自由に好きなことを探究できる様子に魅力を感じていました。今、私はその父の研究を引き継いでいます。

そんな子どもの頃の「興味の種」が育ち、今、植物と線虫に関する研究や異分野コラボなど、さまざまな私なりの“花”に発展しています。

新たな技術開発にチャレンジ中!

マウス精子に関する生殖細胞の冷蔵保存輸送技術の研究をしています。この技術を改良していくことで、マウスや凍結した生殖細胞を用いた輸送方法よりも、コストや技術的ハードルが下がり、これまで以上に多くの研究機関で遺伝子改変マウスの研究ができるようになります。フランスやフィンランドに留学し、研究者と交流した際にもニーズが高まっていると感じました。近年取り組まれ始めた新しい技術

なので、実用するにはまだまだ課題がありますが、その分やりがいや楽しさを感じて日々研究を進めています!

TOEIC320点でも海外で生活やってみたら、見えてくる

学部4年次を休学し、オーストラリアで6カ月間のワーキングホリデーをしました。「このまま、研究の道に進んでよいのか?」と悩んでいた時期で、これまでの人生で味わったことのない経験をした一心で日本

を飛び出しました。渡航中は、さまざまな国籍や人生の背景を持つ人々と多くの時間を共にしました。「科学は魔法みたいで怖い」「半年間、家族を養うために出稼ぎにきた」「国を追われて移住してきた」など、これまでの人生で出会うことのなかった世界に触れ、それまで当たり前と思っていた価値観を「本当にそれは正しいのか?」と自分に問う大きな転機になりました。

前代未聞!? 薬学部の卒論内容をアニメーションに

復学から半年後の卒業論文の際に制作した研究アニメーションは、今も話題に上がることもあり、おそらく日本の薬学部の卒論では初めての取り組みだと思います(笑)。当時はラボでやるべき実験や論文を読むだけでは、なかなか研究の面白さや必要性を感じられないときもあり、研究の道を歩むことに悩んでいた時期。そこで、復学時に偶然出会った論文のアニメーションを観たときに、異分野の内容がすなりと理解でき、その研究の面白さも感じました。「これだ!」と思い、それまで動画編集ソフトを一度も触ったことがなかったのですが、卒業までの半年間でどうにか卒論をアニメーションに仕上げました(笑)。自分の想いを実現したこの出来事は、初めてのクリエイティブな経験だと思います。

応援してくれる人と一緒に新しく広がる世界を楽しむ

休学中のワーキングホリデーも、前例のないアニメーションでの卒論提出も、指導教員の竹尾透教授が背中を押してくれるファーストフォロワーでした。TOEIC 320点の学生がいきなり「大学休んで、海外で生活してみます」って言いだしたら、普通は止めると思うんです(笑)

他にも、「科学を、社会の中でもっと近く感じるものにしたい」と立ち上げた子ども向けの科学実験教室も、開催場所や備品をサポートしてくださる方々のおかげもあって、約2年間で、25回の開催、総参加者は300名以上になりました。

一つひとつは小さなアクションでも、まずは飛び込んで、応援してくれる人たちと一緒に創っていく。まだまだ新しく広がる世界を楽しんでいきたいと思っています!



2023年、修士課程2年のときにフランスのパスツール研究所に留学。共に学んだラボのメンバーと一緒に。

まずは飛び込んでみる!

大学院医学教育部
博士課程1年
前田 龍成 さん
Ryusei MAEDA



前田さんの活動を後押しするキーマンは、生命資源研究・支援センター 竹尾 透教授。「変化を起こしてくれる前田さんの行動力に私もワクワクしています」と、前田さんに期待を寄せる。

研究論文のアニメーション
[Lab Animal volume 51,
pages 256-274 (2022)]はこちら



科学実験教室は累計300名以上の生徒が参加。



関係性の中で作品が育つことを楽しむ

教育学部中学校教員養成課程美術科4年
梅木 久美日 さん
Kumika UMEKI



熊大の校旗のカラーである紫紺とうこんを基調に、クラフトビールの弾けるイメージを表現した吟醸香クラフトビールラベル。



中学校の授業の面白さが絵画を志すきっかけに

美術科で絵画を学び、イベントや展示会などで作品を発表しています。今の道に進んだのは、中学校のときの美術の授業が面白くて、大きな影響があったと感じています。例えば絵筆ではなく手で描いてもよいなど、「こんなに自由な発想でいいんだ」と自分の中のリミッターが外れた感覚がありました。

人々との出会いが自分のアイデアを育てる

1月27日から2月4日、熊本市が主催するイベント「ARTIST WEEK 熊本2024」に美術科のメンバーで参加し、街中の花畑広場で150号の大きなキャンバスに絵を描くライブパフォーマンスを行いました。日常の風景の中で描くことで、道行く人たちに絵の描き方を知ってもらったり、新しい発見をしてもらったりするきっかけになればいいなと思ってはじめてののですが、「この絵のここがいいよね」とか「こんなデザインが見たい」など、自分たちでは思い浮かばなかった新しい視点やインスピレーションが湧いてくる、とても面白くて貴重な経験ができました。

私は、一人で作品が完成するというよりも、他の人たちとの相互作用で育ち、定まってく感覚が強いです。例えば、「分裂酵母Kumadai株を使用した吟醸香クラフトビール」のラベルデザインのお話をいただいたから、クラフトビールについて調べていくうちにイメージが変わったり、泡がはじける様子を作品に生かせないかと考えたりするようになりました。今は、熊本大学珈琲研究会とコラボレーションして、コーヒーを淹れた後の粉を生かして作品を制作するなど、新たな関係性の中で作品が育つことを楽しみにしています。



「自由な発想で自分ならではの世界を描きたい」思いを込めて取り組んだ卒業制作「宇宙(そら)の飛び方」。自由をテーマに幻想的で雄大な空間を泳ぐクジラを表現した。



「ARTIST WEEK 熊本2024」で巨大な絵画を描くパフォーマンスを披露。



生命・自然科学、社会文化科学の融合で、予測できない時代に向き合う

「予測できない時代に分野横断的な取り組みで人々の安全・安心・健康に貢献できる博士人材を育成したい」という発想からスタートした「Well-Being社会を先導する異分野横断型博士人材育成プログラム(Well-Beingプログラム)」に取り組んでいます。企業・行政セミナーやインターンシップ等の科目、海外・合宿研修を通じて、全分野の博士(後期)課程の学生のキャリア開発などに役立つようにと企画した教育プログラムです。多様な分野・国籍の学生にとって親しみやすいテーマにフォーカスしたワークショップや合宿研修を毎年実施しており、グループディスカッションを通じてさらに知見を深めています。

ユニークな大学院教養科目で幅広い視野を身に付ける

私なりに、重要で面白いと考えたテーマを中心に選び抜いた先生方と学生たちの

交流の場が、大学院教養科目「研究の最前線と知の統合」です。Well-Beingプログラム等の博士育成プログラムの学生はもちろん、プログラム以外の修士・博士課程の学生も受講できます。

分野を越えた教員たちのユニークな研究に着目した双方向の対話型授業を毎年実施しています。毎回テーマを考えるのは大変ですが、ハリ先生やアンドリュウ先生の方々にも相談しながら企画しています。

大学院教養科目やさまざまな博士育成プログラムを通じて、学生たちには「今研究していることがすべてではない」と感じ、幅広い視野を身に付けてほしいですね。

グローバル教員と共に国際的・俯瞰的思考力を養う

ハリ先生とアンドリュウ先生は、博士人材育成プログラムのキーマンで、私にとって強力なチームメイト。二人のグローバルな視点や移住者としての意見を生かしたインターンシップや交流は、国際的・俯瞰的思考力を養うためのユニークな取り組み



左からデブコタ・ハリ特任助教、梅田 香穂子准教授、ミッチェル・アンドリュウ特任助教。

交流やニュースがアイデアの素

大学教育統括管理運営機構
デブコタ・ハリ 特任助教
Hari Prasad DEVKOTA

薬用植物の研究が専門で、企業・行政セミナーやインターンシップ、留学生の支援などを担当しています。私自身、いろんな方と話をするのが好きで、多くの方との交流やいろんなニュースがアイデアの素となり、プロジェクトのテーマとなる場合も多いです。国際化や多文化共生が進むことで、専門外のことについても学ぶことができる環境が整ってきたのも本学の魅力の一つです。インターンシップでは学生だけでなく、受け入れる企業・行政からも「学生の新鮮で面白い発想が課題解決になる!」と評価してもらい、継続できています。

みの一つ。学生たちの未来の礎となるような多様性のあるプログラムで、専門分野にとどまらず、幅広い視野を持ち、世界を舞台に活躍する人材を育てていきます。

確かな専門性と幅広い視野を武器にする博士育成プログラム

大学教育統括管理運営機構
梅田 香穂子 准教授
Kahoko UMEMEDA

大学院教養科目「研究の最前線と知の統合」
「持続可能な未来とWell-Being社会」をテーマに、様々な分野の教員が研究内容や研究者の視点を取り、テーマに対する解釈・疑問について、学生と議論、あるいは学生同士で討論できる対話型授業です。

- 授業科目：研究の最前線と知の統合(持続可能な未来とWell-Being社会)
- 履修・授業形態：2025年度秋学期(6月)・春学期(9月)・夏学期(7月) ZOOMによる集中講義(一部、対面授業とZOOMを併用する形態もあり、実施形態・時間割等の詳細は Moodle 等でご確認ください)
- 受講対象：全学の大学院生(修士課程、博士前期課程、博士中期課程、博士課程) ※本学特設の専攻別フェローシップ、SABOフェローシップ、Well-Being社会を先導する異分野横断型博士人材育成プログラムの教育プログラム、大学教員連帯科学教育部の大学教員教育にも含まれています。
- 単位数：1単位(単位取得扱い(修了要件に含む等)については、教員教育部の教務課にお尋ねください)
- 評価方法：出席への参加状況、態度とレポート等による評価

第1回：総論 研究の動向、テーマ設定の重要性 卒業論文等について 大学教員連帯科学教育機構 梅田 香穂子 准教授	第2回：理工学領域でWell-Being 大学院工学部 田邊 博之 教授	第3回：環境化学のWell-Being 大学院環境化学部 中野 純彦 准教授
第4回：地域内歴史・文化の継承とWell-Being 大学院人文社会科学研究部 今村 昌樹 准教授	第5回：インターネット社会の「圏内自由とWell-Being」 大学院人文社会科学研究部 大石 信彦 教授	第6回：総合討論 大学院教員連帯科学教育機構 梅田 香穂子 准教授

※詳細は Moodle でご確認ください。お気軽にお問い合わせください。
<https://hdl.kumamoto-u.ac.jp/ocw/learn.php?id=4471>

✓熊本大学の人文社会科学・生命科学・自然科学の研究者から、各分野の最先端の研究内容や研究者の視点などの話を聞ける!
 ✓履修制限のない異分野の研究者の履修環境や考え方を学べる!
 ✓履修希望者全員が参加でき、対話型授業を通して自身の研究や課題を共有・議論
 ✓「いつか自分の研究や課題、あるいは学生生活で、役立つかもしれない知識や、学びの機会に気づく!」

問合せ・申込先：熊本大学教育統括管理運営機構
 Tel: 096-342-2771、2713(受付時間 平日9時~16時) Email: gra-general@kumamoto-u.ac.jp

(上)大学院教養科目「研究の最前線と知の統合」では、各分野のユニークな教授陣が学生たちの対話を採り入れた双方向の講義を展開 / (右)梅田准教授の愛猫・ななちゃんは、クリエイティブな活動を支える癒やし担当。



“[特集I]感性が発想が躍動する KUMADAI ART思考”に想う

熊本大学 小川 久雄 学長
Hisao OGAWA

「融合」と「共創」をキーワードに改革

今号の『熊大通信』では、自身の専門分野や常識を超えた、ユニークな発想と行動で活躍する研究者や学生たちを紹介しました。いかがでしたか。

熊本大学は、かつて五高生が学んだ建物で重要文化財の「五高記念館」や肥後藩主・細川家ゆかりの古文書など、素晴らしい宝物と伝統があります。

熊本大学ではこのような歴史や伝統を大切にしながら、これからどんどん改革を進めていきます。そのキーワードの一つが「融合」です。

私自身、国立循環器病研究センターの理事長だった際、「融合」の大切さと面白さを知りました。企業と大学の共同研究ラボを新設し、さまざまな企業と共に仕事すると、新たな発想や行動につながっていく実感がありました。それから、その「融合」は「共創」があってこそ実現するというのが私の人生哲学で、もう一つのキーワードです。近江商人の経営哲学「三方よし」にあるように、自分だけのためではなく、相手も周りの人たちもwin-win-winであってこそ、新しい、よいものができます。「熊大東大連携」や東京藝術大学・熊本市現代美術館などと連携を進める「熊本大学キャンパスミュージアム構想」、音楽ホールのオープンなどはまさにその一例です。

この「融合」と「共創」は今ご紹介した「アート思考」にもつながるものだと考えています。

今、熊大で学ぶということ

TSMC(台湾積体電路製造)などの半導体関連企業の進出をはじめ、今、熊本大学は、100年に一度ともいえる大変革期にあります。学生の皆さんには、このときにここで学べるということをぜひ面白い、幸運なことだと思ってほしいです。

私はとにかく「よい場」をつくることに力を注いでいます。一流のよい指導者が教えることで、よい学び手が育ち、さらにより場になる循環がおこります。新学部相当の組織「情報融合学環」や日本初の半導体に特化した学士課程「工学部半導体デバイス工学課程」でもそれを目指しました。新入生を迎えることが本当に楽しみです。

学生の皆さんには、この熊本大学でよく学び、チャンスがあれば、ぜひ色々なところに飛び出して活躍してほしいと思います。

熊大東大連携の詳細はこちら

熊本大学キャンパスミュージアム構想の詳細はこちら

超異分野 de 熊大イグニッション

～魔女狩りからビッグバンまで～

熊本大学に新たにオープンした芸術・文化発信拠点、音楽ホールを舞台に行う熊大通信編集委員会委員4名のトークセッション。文学、物理学、法学、薬学の専門家がさまざまな話題にイグニッション(点火、着火)して展開。学問分野を越えた新たな発見や知的ダイナミズムなど、「本気で学問する面白さ」をぜひ体感してください。

大学院 人文社会科学部
(文学系)

松岡 浩史 准教授
Hiroshi MATSUOKA

専門はルネサンス魔術と魔女狩り。
シェイクスピアを研究中。

大学院 先端科学研究部
(理学系)

小出 眞路 教授
Shinji KOIDE

巨大ブラックホールの近傍から噴出
する高速宇宙ジェットを研究中。

大学院 人文社会科学部
(法学系)

濱田 絵美 准教授
Emi HAMADA

自然災害の被災者の生活再建を支
援するための制度を研究。

大学院 生命科学研究部
(薬学系)

倉内 祐樹 准教授
Yuki KURAUCHI

ストレス対処能力・社会適応能力が
形成されるメカニズムなどを研究。

魔女はどこにいるのか

松岡(コーディネーター) 今回、トークセッションをすることになった背景は、昨年7月に『熊大通信』リニューアルの打ち上げを行った際、我々の話が大変面白かったということで、異分野の研究者たちが話し合ったらどうなるかということの記事をしてみようということでした。まずメンバーの専門分野・研究内容に関して改めて共有しましょう。私の専門はルネサンス魔術、それからシェイクスピアなどの初期近代の演劇を研究しています。

小出 ブラズマ物理学を専門にしています。今はブラックホール周辺のプラズマの研究をしています。

濱田 民法という市民生活に密着した法律を専門にしています。近年は、「平成28年熊本地震」で私自身が被災したこともあり、どういった形で被災者の生活再建を法制度の面から支えることができるのかを研究しています。今年の元旦、「令和6年能登半島地震」が発生したこともあり、このような研究はますます大事になってくると考えています。

倉内 脳科学、中枢神経系を専門にしています。学問領域で言えば、薬理学、薬が身体にどう作用するかという研究ですが、今は、薬だけではなく、心理療法、人の心とは何だろうということにも興味を持ち、研究しています。

松岡 打ち上げのときには、魔女狩りと麦角菌(ライ麦などの穀物に感染するカビ菌の一種)の話で盛り上がりましたよね。魔女の定義は、15世紀に腕利きの異端審問官が著した『魔女に与える鉄槌』により大きく変わりました。それ以前の魔女は、老婆=超自然的な力を持つ者の伝統的イメージでしたが、悪魔と契約したか否かで魔女の認定・処刑がされるようになりました。

小出 実際に害をなしたかどうかとは関係なく、魔女として処刑されてしまうのは、怖いですね。悪魔と契約したかどうかはどうやって確認するのですか？

松岡 ホクロだったり、イボだったりという、いわば誰でも持っているものを悪魔の印として認定していたようです。また、悪魔と交わした契約書というものも残っているんですよ。

濱田 15世紀だったら中世の終期、そこから16~17世紀の初期近代に入る頃です

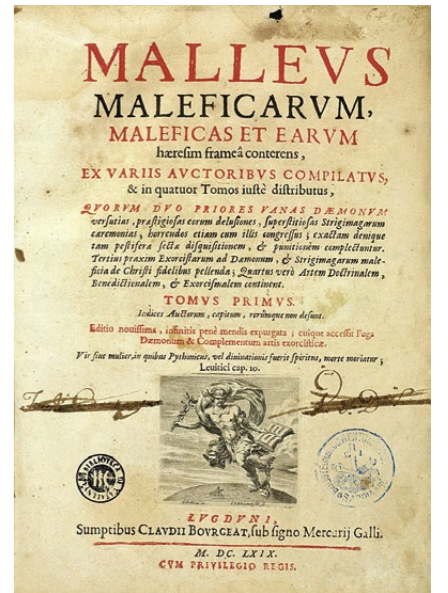
ね。近代化に進みだした時代だからこそ、魔女の証明や契約書の存在など、細かな手続きが必要だったのではないのでしょうか。これ以前なら、長老の一言で魔女と認定されそうです(笑)

松岡 確かにそうですね。その後、初期近代に「魔女論争」が起こり、推進派と懐疑派に分かれました。その際の懐疑派の主張は、「魔女なんていない」ということではなく、「魔女とされている人物は幻覚を見ている、自分が魔女だと思い込んでいる」というものでした。ところで麦角菌はLSDと似た幻覚症状を引き起こします。この発生分布を調査した本があって、それを読んだときに、私はヨーロッパにおける魔女狩りと麦角菌の発生分布に相関関係があることにハッと気づきました。いずれ学会で発表をと考えていますが、その前に倉内先生など、薬学の専門家の話をぜひ聞かせてください(笑)

倉内 私は心の研究をしていることもあり、大変面白いお話だと思いました！ 麦角菌の中にはアルカロイドという成分があって、自律神経のアセチルコリンの働きを抑えることで脳の血流が下がり、幻覚の症状を引き起こすと言われています。しかもLSDは麦角菌の中のリゼルグ酸を元に合成されているんですよ。そこも繋がるなとますます興味深く感じました。アメリカのマサチューセッツ州で起こった「セイラムの魔女裁判」に関しては、麦角菌がついたライ麦を食べ過ぎたことで、幻覚やけいれんなど、普段とは違う症状が起きて魔女として認定されてしまったという書物を読んだことがありますね。

松岡 そうなんです。今日は文学、物理学、法学、薬学の専門家が集まっていますが、さまざまな分野を横断する現象は過去・現在とも起こっています。私の研究分野だと黒死病などのローカルな病とも結びついているのが非常に興味深いですし、皆さんとお話することでそれを実感しますね。

濱田 確かに。文学の研究では、どのように学問的なアプローチ、理論に基づく分析や検証がなされているのか、他分野の私はなかなかイメージできなかったのですが、松岡先生がお話された、現代の科学的知見からアプローチする分析手法や倉内先生の薬学の話と繋がるのは、とても面白いです！



異端審問官であったハインリヒ・クラマーの著書『魔女に与える鉄槌』。魔女の定義や魔女狩り人、魔女裁判の心得と手引きが記されている。

いったい何がどうなったら「存在している」といえるのか

松岡 ある現象を多角的にみるとき、色々な分野の知見などが繋がってくるのが面白いですね。例えば「存在とは何だろうか」と考えるとき、点は、数学、ユークリッド幾何学では線と線が交わったところと定義されますよね。ただ、そこには体積も面積もない。つまり点は存在するとも、存在しないともいえる。これは仏教でいう「自我」の定義と似通っていると感じます。それに物理学的に言うと、素粒子が振動していれば「存在している」ということですよ。先ほどの「点」や例えば「私」のようなものも関係性の中で定義されると考えています。

小出 「点」や「私」などの「存在」は意識が生むものですね。養老孟司氏は『まる ありがとう』(西日本出版社、2021年)の中で「意識はどんどん抽象化して『同じ』にする。それを繰り返して突き詰めると最後は一つになる。その頂点はユダヤ教、キリスト教、イスラム教のような一神教における『神様』である」と言っています。仏教では何にあたるでしょうか。「空」ですかね？

松岡 「空」は仏教における悟りの境地で、情報の抽象度が極限まで高まった状態です。例えば、「犬」よりも「動物」のほうがその言葉が持っている情報は少ない、つまり抽象度が高いですよ。物理学(熱力学)では、エントロピー(乱雑さ・無秩序さの度合い)が増大するとカオスに向かうと



考えるわけですが、情報宇宙ではむしろ知識が統合されてエントロピーは極小化していくと思うんです。ここで小出先生のご専門でぜひ伺いたいのが、なぜビッグバンが起きたのかということです。

小出 まず、なぜビッグバンが起こったのかということについては諸説ありますが、まだ科学的に十分な根拠のない状況です。そこで、なぜビッグバンが起こったといえるのかをお話したいと思います。遠方の銀河ほど、われわれからその距離に比例した速さで遠ざかっているという「ハッブル-ルメートルの法則」というのがあります。時間を逆回すると、宇宙は138億年前に1点から生じたことになります。宇宙が断熱膨張しているとすると、宇宙が生まれたときはかなりの高密度・高温であったことになります。そのような想像を絶する状態を揶揄して「ビッグバン」と呼んだ人がいたのですが、

いつのまにかこの名称が定着しました。

倉内 ビッグバンが起らなかったという説はないのでしょうか？

小出 例えば、アルファバンは宇宙の成り立ちをプラズマで説明しようと試みましたが、その宇宙論は否定されています。ビッグバンの初期の高温ガスから発せられた光の残響が電波として観測されます。この「宇宙マイクロ波背景放射」の精密な観測はビッグバン宇宙モデルの予想とみごとに一致しており、今では、ビッグバン宇宙論は精密科学とみなされています。

松岡 宇宙の始まりがビッグバンだとすると、その時点でのエントロピーについて、先生はどうお考えでしょうか。

小出 ビッグバン宇宙論では宇宙は一点から膨張し現在も膨張し続けていますが、膨張が断熱的であれば宇宙のエントロピーは変化しないか増大します。このこと

から、ビッグバンが始まった頃のエントロピーは最小であったといえます。

松岡 ビッグバンも波動方程式(音波や電磁波などの波動現象を記述するための方程式)で記述するのですよね？ 分析哲学的な観点から言えば、波動方程式がなければビッグバンは存在しない。つまり観測者、認識があってこそ、その存在があるのでは私は捉えているのですが。

小出 ぼくには分析哲学からのお話は分かりませんが、ビッグバンや宇宙膨張に関することで不思議なことはあります。先ほどの「ハッブル-ルメートルの法則」ですが、最近の観測ではこの遠ざかる速さが等速や減速ではない、つまり加速度的に宇宙が膨張しているというんですね。現在は、そのよく分からないところを「ダークエネルギー」という概念に押し付けていると感じることはあります。

濱田 先生方のお話を聞いていると、研究する際、「何があるか、ないか」の観測、「あるとすれば何があるのか、原因は何か」の分析に重点を置いているように感じます。いかがですか？なぜそこが気になったかという、法律学、特に私が専門とする民法では、当事者がなにを欲したか(「あってほしい」か)、契約で何を「あるべき」と合意したかということを考えるからです。「あるもの」と「あるべきもの」に齟齬がある場合には契約違反などの問題が生じるので、これは重要な視点なんです。

倉内 病気、特に精神疾患は、メカニズムはよくわからないけれども、効いているという薬があります。そこからこういう疾患の原因にはこういうものがあるはずだと考えることはありますね。

松岡 「ある」、「ない」でいうと、私は魔女、亡霊、妖精などオカルト的なものを研究対象にしています。オカルト(occult)は、ラテン語で「隠されている」が原義です(対

義語は、マニフェスト(manifest))。目に見えない謎の作用力X(例えば魔女や妖精の持つ力)が何の説明原理になっているのかを考えることが私の研究では多いですね。

魔術、物理学、錬金術の交差点 ニュートン

松岡 他に、皆さんに関連しそうな話として魔術の話があります。ルネサンス期には3層の魔術が想定されていました。一つ目は月の下の世界である物質世界に働きかける自然魔術、二つ目は月よりも上の星々の世界、8層から12層の天球が巡るのですが、それに働きかける占星魔術、三つ目が神々の世界に働きかける儀礼魔術です。

小出 とても面白いですね。地上と天界と神という3層の世界観は、ニュートンが行った研究にもつながるんですよ。ニュートンは、万有引力の法則で、地上と宇宙、魔術でいえば天界の世界が同じ一つの物理法則で動いていることを明らかにしました。ニュートンは、落下するリンゴを見て万有引力の法則を発見したといわれますが、実は月の運動も考え合わせて法則を確信したそうです。ただ、ニュートンは「最後の錬金術師」ともいわれているように、後年は錬金術の研究に熱中したようです。

濱田 こんな形で、文学における魔術や錬金術と現代の科学がつながるんですね。他に何か、意外なつながりはありますか。

松岡 先の3層の魔術のうち、占星魔術にはエーテルというものが不可欠で、これは錬金術にも出てきます。この概念も、科学にありましたよね。

小出 光が電磁波という波の一種であることが明らかになったとき、その波が伝わる媒体がエーテルと呼ばれました。電磁波の存在を明らかにしたマクスウェルの電気と磁気の理論では、光の速さは観測者によらず一定です。アインシュタインはこのことを原理のひとつとして特殊相対性理論を完成させました。この理論により光の媒体としてのエーテルは必要ではなくなりました。

倉内 エーテルと聞くと、薬学では吸入麻酔薬(ジエチルエーテル)を想像しますね。昔、錬金術的な営みに興味を持ったことはあるんです。薬学の人モノを作る感覚があって、そこに限界を感じていて何とかできないかなと(笑)

松岡 実は私も錬金術に挑戦したことが



今回のトークセッションで松岡准教授がイメージしたシェイクスピア時代の芝居小屋「グローブ(The Globe)」。青天井の張り出し型の舞台。舞台の天井には黄道十二宮が描かれ「天」を、ステージの地下は「地獄」を示す当時の宇宙像が舞台に再現されていた。(写真出典/https://www.shakespearesglobe.com、写真撮影/ジョン・トランパー)

あるんです。錬金術におけるエーテルは、「作用力そのもの」のことで、物質ではないのですが、これを物質化して操作可能にすることが錬金術師たちの目標だったんです。永遠の物質である「賢者の石」ともいわれますよね。錬金術には明確なレシピとして12ステップがあるのですが、その4ステップ目くらいに「冷たい火」というものを用意しなくてはいけなくて挫折しました(笑)

好奇心の趣くままに学んで語り合う。 総合大学だからこそつながる点と線

松岡 もうこんな時間ですか！ あっという間ですね(笑)。このトークセッションを振り返ると、シェイクスピア自身が建設に関与したグローブという中世の野外劇場を思い起こします。開けた天井と舞台、そして観客という3層が魔術の世界観を表し、私たち登壇者はそこで自由に議論する演者とといったイメージで、さまざまな視点で論ずる面白さを存分に味わいました。皆さんはいかがでしたか？

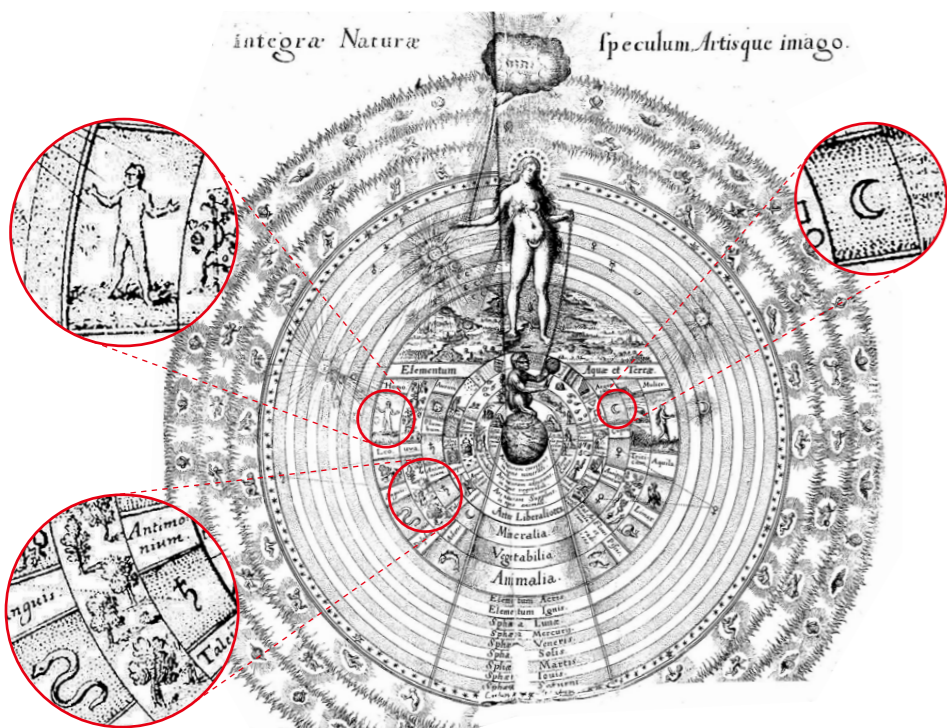
小出 今回のセッションでは、全く分野の違うもの同士で、これほど話が盛り上がるというのは意外で面白かったです。こういう機会をもっと日常的にしたいですね！ 多様な研究者と話すことで、大学もますます活性化しますし、社会全体にもさまざまな影響を与えることができると思います。

倉内 今日のトークセッションのように、やっとならばさまざまな分野が融合できる環境がつけられはじめています。薬学部ではどうしても薬剤師免許の取得を

気にしがちですが、一步、社会に出れば、多様な人と話して協力していくことが大切で、学生の皆さんには、色々なことに興味を持ち、知識を身に付けてほしいと思います。

濱田 一つの物事を異なる分野からアプローチすると、どうなるかという学問的な面白さを体感しましたし、例えば「存在」や「エーテル」など、一つのキーワードからバトンを繋ぐように連想して、さまざまな話が展開することで、新しい見方を教えてくれるのも面白かったです！ 熊本大学は総合大学だからこそ、これができると思います。医学部や薬学部など、キャンパスが異なる学部の学生であっても教養教育の授業やサークルなどで集いますし、学生たちにもどんどん他学部の学生と話して、今日私たちが感じたこの面白さやダイナミクスを味わってみたいですね！

松岡 私も楽しかったです！ 学会では、針穴に糸を通すような、どうしても近視眼的視点な議論になってしまいます。エントロピーなんて口が裂けても言えません(笑)。でも、そもそもなぜ自分が研究者になろうと思ったかという、こういう話がしたかったからなんですよ。スティーブ・ジョブズのスタンフォード大学卒業式での有名なスピーチの中に、「Connecting the dots」という発想がありますが、それぞれ「点」で研究しているものが繋がったり、ある程度共通した問題意識があったりと非常に興味深かったです。熊大生や「熊大通信」の読者の皆さんもぜひ自分の好奇心の趣くままに、色々なことを学び、語り合ってください。



16~17世紀に活躍したイングランドの医師、ロバート・フラッドが描いた大宇宙と小宇宙の概念。大宇宙そのものを人間として表し、層を成す図上には、物理学や宇宙にも関係する「地上(地球)」、「木」、「月」、「人」などを見ることができる。

しなやかな社会基盤を創造し、
自然災害に強いまちをつくる

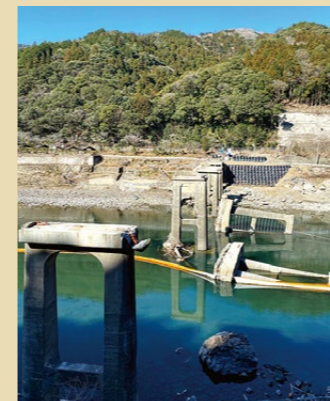


都市圏全体の効率化と安全性を向上
レジリエントな社会の形成を目指して

交通工学を専門とする安藤助教が探究しているテーマの一つが道路ネットワーク。都市圏全体の効率化を図るために、移動時間や燃費、安全性などを指標に多角的な分析を行うほか、地震や洪水などの自然災害に備えて、う回路が少ない場所や孤立が発生しそうな地域を数理モデルで見つける研究を行っています。「災害や危機に負けないレジリエントな社会を創るのが目標です」と安藤助教は語ります。



「熊本都市圏道路網」は、あらゆる研究のデータベースとなる道路ネットワーク。令和4年度は、自動運転専用レーンを設置するなどの道路にすると都市圏全体の利益となるのかを研究。



「令和2年7月豪雨」では、国道・県道や鉄道なども甚大な被害を受け、球磨川に架かる橋梁のうち10橋が流出した。写真は大きな被害が出た球磨川の橋梁の一つ。災害の影響で社会インフラが破損してしまった一例だ。

よりよい社会を
構築するために
都市や交通をデザインする
学問領域

土木計画学



柿本・安藤研究室では、同研究室の学生だけでなく、他の研究室の学生へも交通理論ゼミを行っている。「他の学生の視点や意見などを生かして成長してほしい」と安藤助教。写真は交通理論ゼミで使用する教科書。

熊本大学大学院先端科学研究部(工学系)

柿本・安藤研究室 Civil Engineering Laboratory

研究室配属時に簡単なプログラミングを学ぶために使うプログラミング言語「Python」に関する演習本。



安全・安心な生活を支える
社会インフラをデザインする学問
「土木計画」を探究する
柿本・安藤研究室を訪ねました。

くまもと水循環・減災研究教育センター
柿本 竜治 センター長・教授
Ryuji KAKIMOTO

専門は土木計画学。行政の意思決定に役立つような土地利用から公共交通まで幅広いテーマで研究を行っています。週に1度の合同ゼミでは、安藤助教が異なる視点で物事を捉えて、多様な意見をもらえるので大変助かります。



くまもと水循環・減災研究教育センター
安藤 宏恵 助教
Hiroe ANDO

土木計画学の中でも交通工学を専門に、交通に関する多様な技術や交通ネットワーク、災害時の交通などを分析しています。座右の銘は「耐雪梅花麗(雪に耐えて梅花麗し)」。辛いときもいつか花開くときを信じて、また研究に向かう力をくれる言葉です。



大学院自然科学教育部
博士前期課程
土木建築学専攻 2年
浦田 真成さん
Masanari URATA

社会基盤の構築からまちづくりまで
暮らしに根付いた魅力ある分野

熊本市内の「自転車の走行しやすさ」を評価する研究を行っています。自転車利用者が感じる「走行しやすさ」が道路属性の違いによってどのように変化するのか調査したり、自転車レーンの整備計画が走行しやすさにどのように影響するかを考察しています。土木はIT(情報技術)などと同様に暮らしに根付いている分野で、社会基盤の構築からまちづくりなども含めて、人が生活していく上で決してなくなることがない領域です。それは大きな魅力ですね。



工学部土木建築学科4年
出口 陽菜子さん
Hinako DEGUCHI

都市構造の経年変化を分析
建設コンサルタントの道へ

熊本市が目標とする「多核連携都市」に適切に向かっているかを検証するため、複数の「コンパクトシティ評価指標」を用いて都市構造の経年変化を分析する研究を行っています。都市開発に携わる知見や都市構造の因果関係など、熊本市を一つの事例として学ぶことが目標です。GIS(地理情報システムソフト)を使いこなすのは大変な一方で、活用できた際には自分の成長を感じることができ、やりがいにもつながっています。

seedsの未来

研究が目指す未来は「災害に強いまちづくり」。これまで道路網を中心に研究してきましたが、災害に強いまちをつくるという観点から、道路だけでなく情報ネットワークやライフラインなどインフラとの関わりを踏まえた研究を目指します。



研究室をのぞいてみよう!!

私たちが
研究室を案内
しています。
見てね♪

「熊大通信」連動
知のseeds
研究室探訪の
動画はコチラ♪

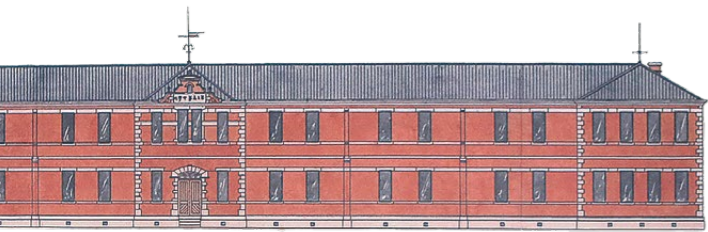


熊本県内はもとより、国内外で活躍している先輩たちの様子を、これまでの歩みや苦労そして喜び、楽しみなどを通じてご紹介します。

大学の卒業生たちの今に迫る「卒業生ジャーナル」。

GRADUATE JOURNAL

卒業生ジャーナル



浅野 聡文
Toshifumi ASANO

- ▶ 旭化成株式会社(静岡県)
- ▶ 大学院薬学教育部博士前期課程 創薬・生命薬科学専攻 / 2019(平成31)年3月修了
- ▶ 大学院薬学教育部博士後期課程 創薬・生命薬科学専攻 / 2022(令和4)年3月修了

Profile—
1994(平成6)年生まれ、熊本県熊本市出身。熊本県立熊本高等学校卒業。趣味は釣り、旅行など。

知見を活かしメーカーの研究職へ

薬学部では、有機合成化学を専攻し博士号を取得しました。その中で化学によるモノ作りに興味を持ち、総合化学メーカーでの研究職を目指すようになりました。現在は、大学時代に培った有機化学の知見を基に、製品開発・研究を分析化学の観点から支援しています。

在学は臆せずチャレンジを!

学生時代は、飲み会やアルバイト、趣味、そして研究に明け暮れました。熊大は、教員と学生の距離が近く、いつでも熱い研究論議をかわすことができ、研究や仕事の進め方、考え方を大いに学ぶことができました。挑戦を支援してくれる大学ですので、在学は臆せずさまざまなことにチャレンジして欲しいですね。

学生と教員の距離が近く、手厚い指導が受けられるところ

薬学系



香武 秀和
Hidekazu KOTAKE

- ▶ 合同会社revive(東京都)
- ▶ 工学部建築学科 / 2013(平成25)年3月卒業
- ▶ 大学院自然科学研究科博士前期課程 建築学専攻 / 2015(平成27)年3月修了

Profile—
1990(平成2)年生まれ、福岡県豊前市出身。福岡県立京都高等学校卒業。趣味は建築巡り、ブログラミング。

未経験を臆せずSEへ転身!

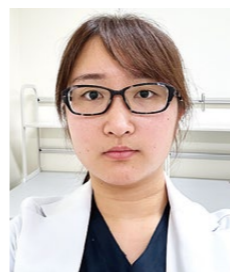
博士前期課程を修了後、建築系だけでなくより幅広い分野の理解と実践を目指し、未経験ながらシステムエンジニア(SE)へ転身。Web広告会社、東南アジアをターゲットとしたスタートアップの会社を経て現在は、建築、農業、エンタメなどさまざまな分野のアプリやWebサービスの開発に従事しています。

生涯の友ができる熊大の魅力

今になって思えば、熊大の人たちはバランス感覚のいい人たちが多かったと感じます。遊びも学びも全力で楽しめる環境があるからか、精力的な人が多く、現在では熊大の友人同士で仕事をする事も出てきました。切磋琢磨できる一生の友人ができる環境は、熊大の魅力の一つだと思います。

バランス感覚豊かな人々と遊び! 学び! 磨き合う環境

工学系



藤井 綾香
Ayaka FUJII

- ▶ 熊本大学病院(熊本県)
- ▶ 医学部医学科 / 2022(令和4)年3月卒業

Profile—
1998(平成10)年生まれ、岡山県浅口市出身。岡山県立岡山大安寺中等教育学校卒業。趣味は、おいしいお酒を探すこと。

「柴三郎プログラム」で二刀流!

高校生の頃から医療系の研究に興味があり、研究に力を入れている熊本大学医学部医学科に進学。卒業後は、初期研修と大学院博士課程に並行して取り組める「柴三郎プログラム」を利用して、熊本大学病院で初期研修を始めました。現在は基礎系の研究室で精神疾患についての研究に取り組んでいます。

学生の思いを人と制度で支援

今の研究室との出会いは、周りの人に「研究に興味がある」と言っていたことから偶然に繋がったものです。医学科の6年間の授業やテスト・実習は大変なときも多くありますが、それ以外にも興味を持っていることがあれば、それをサポートしてくれる教室はたくさんあると思います。

学生の「やってみたい気持ち」をサポートしてくれるところ

医学系



松岡 薫
Kaoru MATSUOKA

- ▶ 天理大学文学部講師(奈良県)
- ▶ 文学部地域科学科文化表象学専攻 / 2005(平成17)年3月卒業、大学院文学研究科地域科学専攻 / 2007(平成19)年3月修了

Profile—
1982(昭和57)年生まれ、福岡県久米市出身。福岡県立明善高等学校卒業。趣味は演劇鑑賞。新劇・小劇場・ミュージカル問わず、最近は文案にもはまっています。今年こそは登山を始めたい!

フィールドワークで民俗学に夢中に

高校までの社会科・日本史とは違うアプローチで日本社会や日本史について学びたいと、民俗学を専攻。知らない土地を訪ねたり、人と語らうフィールドワークの面白さに魅了され、今に至ります。高校時代から好きだった芝居や演劇のことを、民俗学という枠組みの中で研究しようと日々もがいています。

分野を越えた学びが今の糧に

文理の垣根を越えて学べることが熊大の良さの一つ。水俣病や建築史の授業など、卒業要件のために取った授業だったりするのですが、自分の知識や関心を広げるきっかけになりました。せっかく4年間学ぶのですから、自分の関心の枠を飛び越えて、色々な授業を取ってみることをオススメします!

教員や先輩・後輩と親密な距離感! 学内外で語り合い、今がある

文学系



木場 正治
Masaharu KOBA

- ▶ 株式会社グローバル・クラウドファンディング(株式会社肥後銀行より出向中)(熊本県)
- ▶ 法学部法学科 / 2009(平成21)年3月卒業

Profile—
1986(昭和61)年生まれ、熊本県熊本市出身。熊本県立第二高等学校卒業。趣味はサウナと旅行。

銀行業務からクラファンの運営へ

学生時代に金融に興味を持ち、地元で仕事をしたいの思いから株式会社肥後銀行へ入行。本部や支店での銀行業務の経験を経て、現在、「株式会社グローバル・クラウドファンディング」へ出向し、熊本大学とも連携しているクラウドファンディングのプラットフォームを運営しています。

貴重な学生時代の時間を有効に

仕事をしていると、「あのときもっと勉強をしておけばよかった」と学生当時を省みる事が多々ありますが、学生時代に経験してきたことが生きる場面も数多くあります。学生時代の時間は、非常に貴重なもの。今、自分がやりたいことを一番に、楽しい学生生活を過ごしてください。

豊かな自然と歴史ある環境で、充実した学生生活が過ごせる

法学系



一宮 愛菜
Mana ICHIMIYA

- ▶ 加寿美学園熊本中央高等学校
- ▶ 理学部理学科数学コース / 2018(平成30)年3月卒業

Profile—
1995(平成7)年生まれ、大分県大分市出身。大分県立大分上野丘高等学校卒業。趣味は旅行や映画鑑賞。

夢を叶えて高校教師の道へ

子どもや学校が好きで、教員になりたいという夢を持っていました。さまざまなご縁をいただき、教職に就く夢を叶えて今の高校に勤めています。たくさんの生徒たちとの出会いに刺激をもらい、自分自身も日々学び、成長しています。大変なこともあります、毎日楽しく教壇に立っています。

学生時代の経験が今を支える

専門の数学の勉強はもちろん、教員になるための一般教養や実習での経験等さまざまなことを学びました。他にも大学祭の実行委員やボランティア活動などに打ち込み、その経験も、今の教員生活にも繋がっています。どんなことにもまずは挑戦! 人との縁を大切に大学生活、楽しんでください。

幅広く学べるコース選択が可能! 教員を目指す仲間と切磋琢磨できる

理学系

ボランティアやサークル活動を通して多くの経験ができる!

教育系

未来への 羅針盤

the compass to the future



熊本大学に寄贈された黒田正次の作品「松月」。

日本画家 黒田正次

文／藤本 秀子（五高記念館）

黒田^{しげあき}正次、本名をロバート・H・クラウダーという。

アメリカのイリノイ州で生まれ、大学卒業後、1934(昭和9)年、ピョンヤン(現北朝鮮の首都 平壤)の外国人学校教師となったが、夏休みには東京へ赴き著名な日本画家に花鳥画を学んだ。その後、東京に移り住み、附立^{つきたて}*という水墨画の技法も身につけた。

一方、生計のため、英語を教える仕事を続けていたが、東京帝国大学の英文学教授の目に留まり、1939(昭和14)年に第五高等学校の英語教師として熊本へ赴任した。五高では、優れた英語教師として歓迎され、週に一度、住まいの外国人教師館をオープンハウスとして開放した。生徒たちとは、英会話の練習やアメリカの社会や生活について語り合ったという。だが、1941(昭和16)年12月8日、日米開戦の日に敵性外国人として教師館から連行され、1943(昭和18)年にアメリカへ送還されるまで、国内の収容所で絶望的な日々を過ごすことになる。

帰国後、日本で身につけた生け花の技術を活かしてシカゴの花屋で働き、第二次世界大戦後は、日本絵画のさまざまな技法を駆使した屏風絵や壁紙の制作を生業とした。後に、アート製作会社を起業し、アメリカの高級ホテルは挙ってこの会社の壁紙を使用したという。日本画家としてもまた、ビジネスの成功者としても名を知られるようになったのである。

アメリカ国内有数といわれる日本美術のコレクションに囲まれつつ晩年を過ごしながら、「熊本は私の故郷」と懐古したクラウダー。その願いは、梅雨時の日本に戻ることだった。「傘をさし、小さな寺か神社の苔むした境内を眺められる片隅に、じっと座っていたい」と……。一方で、戦後の日本を目にしたくないという思いもあったという。

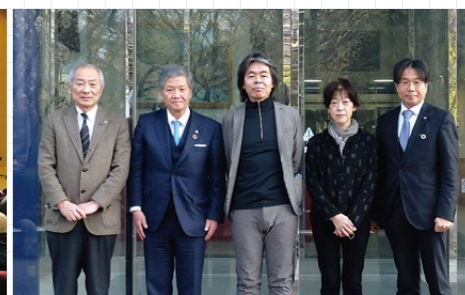
だが、細やかな願いを叶えることなく、2010(平成22)年の日米開戦と同じ日に99歳の生涯を閉じた。

*附立……輪郭線を用いない彩色の技法

KUMADAI TOPICS

Report

熊本大学キャンパスミュージアム講演会「日比野克彦氏～アートのカ～」を開催しました



2月10日、熊本大学にて、「日比野克彦氏～アートのカ～」と題し、講演会を行いました。東京藝術大学長・熊本市現代美術館長であり、アーティストとしても活躍する日比野氏は、国内外で多数のプロジェクトに参画。アート・福祉・医療・テクノロジーなどの異分野融合から生まれるアートの思考を生かし、地域や社会の課題解決に取り組んでいます。講演では、アートの力で社会

的課題に取り組む「ご用聞き」や国内外での「文化的処方」の事例などを分かりやすく紹介。工学部百周年記念館に集まった、中高生から一般の方まで幅広い年代の参加者が真剣に聞き入っていました。講演会終了後は、工学部研究資料館の特別開放を行い、多くの方が、重要文化財である動く工作機械群を見学し、熊本大学の文化財を満喫されていました。

Report

「第3回Kumadai-Hub巡回ポスター展」を開催しました



12月19日、熊本大学の“自称”若手研究者・学生等有志による組織「Kumadai-Hub」は、分野にとらわれない自由な交流の場をつくり、大学内外の多様なステークホルダーが互いを知り合うことを目的として「第3回Kumadai-Hub巡回ポスター展」を黒髪キャンパスにて開催しました。当日は、いわゆる文系から理系まで、さらには社会実践などをテーマに52の個人・団体がポスターを出展。学内のみならず熊本県立大、尚綱大、長崎大、九州大、九州工業大、沖縄科学技術大学院大、京都大、東京工業大、東北大など17の学外機関からの参加者も合わせて150名以上の方が参加しました。

Report

「第一回東大分室ワークショップ」開催しました



12月14日、「第一回東大分室ワークショップ」として東京大学先端科学技術研究センター所長・杉山正和教授をお招きし講演会を開催いたしました。杉山教授は、半導体の単結晶成長技術やそれを活用した多接合太陽電池の研究に長らく従事され、最近では電気化学を用いたカーボンニュートラル実現に向けて研究をされています。現在は、内閣府ムーンショットプロジェクト「2050年までに、地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現」のプロジェクトマネージャーをされています。半導体、製膜プロセス、電気化学、エネルギー、化学工学と多様な背景をお持ちであり、大変貴重なご講演をいただきました。心より感謝申し上げます。

Info

災害をテーマとした法律系シンポジウムを開催します



大学院人文社会科学部(法学系)において、自然災害時に生じる法律問題をテーマにシンポジウムを開催します。

- 日時/6月15日(土)14:00~17:00(予定)
 - 場所/熊本大学黒髪北キャンパス 文法棟本館2階A1教室
 - 参加対象者/一般の方、どなたでも
- ※事前申込不要
※参加無料

【お問い合わせ】
熊本大学大学院人文社会科学部(法学系) 濱田絵美
E-mail e-hamada@kumamoto-u.ac.jp

Report

「第16回熊本大学東光原文学賞」学長賞・附属図書館長賞を発表しました



1月12日、熊本大学附属図書館で「第16回熊本大学東光原文学賞」学長賞・附属図書館長賞を発表し、表彰式を執り行いました。本文学賞は、熊大生が執筆した応募小説から特に優れた作品を表彰するもので、2008(平成20)年度から開催しています。第16回の東光原文学賞には15篇の応募があり、附属図書館内の一次選考および学内外の有識者による最終選考の結果、「学長賞」1篇、「附属図書館長賞」3篇が選出されました。

● 学長賞

篠原 爽馬さん(文学部3年)
受賞作品「Absolute/Fragile」

● 附属図書館長賞3篇

池田 結理愛さん(文学部2年)
受賞作品「青海」
坂田 悠美香さん(文学部3年)
受賞作品「ネーランドの黎明」
吉野 美羽さん(文学部2年)
受賞作品「ロスティーン」

受賞作品は、3月に「第16回熊本大学東光原文学賞作品集」として刊行し、希望者へ無料で配布します。また、附属図書館のホームページでも公開を予定しています。

Report

環境省電動スクールバス実証事業の成果発表セレモニーを開催しました



1月17日、熊本県球磨村で、電動スクールバス実証事業の成果発表セレモニーを開催しました。本セレモニーには、環境省前田大臣官房審議官、熊本大学大谷理事・副学長、熊本県田嶋副知事、球磨村松谷村長をはじめとする関係者約100名が出席し、松田俊郎シニア准教授による電

Report

教育学部附属特別支援学校 後藤 匡敬教諭が 文部科学大臣表彰を受けました



1月16日、東京大学安田講堂において、附属特別支援学校の後藤 匡敬教諭が「文部科学大臣優秀教職員表彰」を受けました。主な受賞理由は以下のとおりです。
①クラウド型授業支援システム「ロイロノート・スクール」の授業活用の基礎構築
②「情報活用能力を発揮して未来社会を切り拓く知的障がいのある児童生徒の育成」の研究推進
③プレゼンテーション教材配信サイト「Teach U」の立ち上げと教材提供(世界中で活用中)
④特別支援教育とICTに関する執筆活動・指導助言・講演等
⑤「知的障がいのある児童生徒のICT活用」についての授業実践。



詳細はwebでcheck!



動スクールバス実証事業の内容と成果の発表後、参加者による試乗会が行われました。参加者からは、電動スクールバスの有用性を理解できた、今後の社会実装の取り組みが具体化されている、などのコメントが得られ、好評のうちに終了しました。

Report

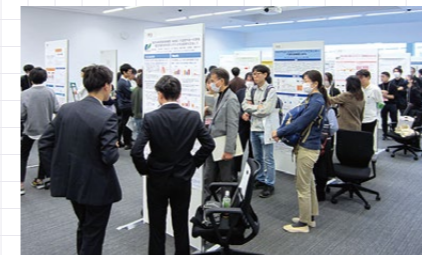
「さくらサイエンスプログラム」で イギリスとフランスの学生ら9名が来学



国際先端科学技術研究機構(IROAST)では、1月22日から28日まで、科学技術振興機構(JST)が実施する交流事業「さくらサイエンスプログラム」の支援をうけて、ロンドン大学シティ校(イギリス)およびリヨン大学(フランス)から6名の大学院生と3名の教員を招待しました。参加者は、熊本大学での講義や高層建築物の建築工事の見学などを通して熊本地域における建築物の耐震・免震技術について学びました。また、本学学生とのディスカッションや交流会で交流を深めたり、雄大な阿蘇の景観や文化にも触れたり、参加者からは大変有意義な経験だったとの感想が述べられました。

Report

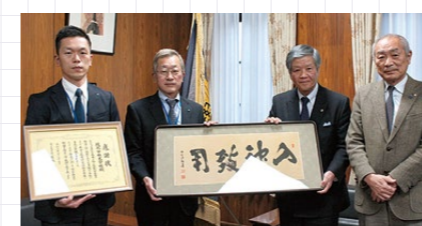
「西日本医学生学術フォーラム2023」を開催しました



12月2日、「西日本医学生学術フォーラム2023」を本学が主催校となり開催しました。本フォーラムは、研究志向のある医学生が熱意ある指導教員とともに集い、日頃の研究成果を紹介し、親交を深める研究集会です。九州初開催となる今回は、初参加の6大学が加わり計16大学から115名(オンライン参加を含む)の医学生や教職員が会場となる熊本県医師会館に集いました。当日は口頭発表14題、ポスター発表29題の発表による熱いディスカッションが交わされました。また、本フォーラムから巣立った先輩研究医の先生方の対談プログラムも大いに盛り上がり、盛会のうちに幕を閉じました。

Report

名誉会員への感謝状贈呈式を行いました



1月23日、数回にわたり多額の御寄附を賜りました「堤化学株式会社」様に対して、感謝状と記念品(扁額)の贈呈式を執り行いました。いただいた寄附金は、本学の基金事業活動に使用させていただきます。

熊本大学基金へのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。 No.65(令和5年11月1日～令和6年1月31日)

皆様からご寄附をいただき、研究・教育に資する事業に取り組ませていただきました。熊本大学基金に対しまして深いご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

今号では、令和5年11月1日から令和6年1月31日までの間に入金を確認させていただきました個人150名、8法人・団体のすべての寄附者の皆様へ感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。公開を希望されない方につきましては、掲載しておりません。

また、万一お名前に記載漏れがある場合は、誠に恐縮ではございますが、基金事務局(電話:096-342-2029)までご連絡ください。

皆様のさらなるご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. お名前・寄附金額の掲載

(寄附金額別、五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※()内の数字は、累計寄附金額(万円)です。

【326万円】	熊本大学医学部医学科後援会(2497)		
【200万円】	黒木 政秀(700)	医療法人桜十字(200)	
【100万円】	岡田 順子(100)	米良 克美(100)	
【50万円】	山田 和彦(180)	株式会社久仲工建(550)	
【20万円】	宮脇 正行(21)		
【10万円】	増田 武信(30)		
【5万円以下】	荒木 幹生(3.5)	金澤 国信(1)	金山みちる(1)
	上妻 秀明(1)	迫 孝生(0.5)	杉野 精一(1)
	田上 辰也(1)	都甲 哲也(1)	平川 清美(1)
	宮本 真次(9.1)	吉本 寿美(1)	渡辺 勉(3.9)

2. お名前のみ掲載

(五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※[]内の数字は、累計寄附回数(回目)です。

安倍 昂洋[2]	荒井 澄子[11]	家村 素史[1]	入江 弘基[3]
上田 一生[7]	大下 榮子[1]	大谷 順[3]	大坪 潔晴[5]
大淵 憲二[1]	亀崎 真央[1]	川原 保[1]	迫田 隆吉[2]
佐々木 信生[6]	佐藤 俊幸[1]	新谷 博美[1]	園田 寛[4]
竹内 賢二[1]	田村 知代[2]	戸塚 誠司[6]	中村 文彦[1]
鍋倉 康文[2]	橋本 司[3]	波多野 恭行[32]	旗生 康之[1]
濱田 千恵美[1]	林 陽子[1]	春山 康久[7]	福永 健一[1]
水野 雄二[3]	宮尾 千加子[3]	柳田 敏孝[17]	矢野 恵美子[5]
矢野 登久男[8]	株式会社think garbage[1]		
	株式会社ダイヤモンドブルーイング[2]	カンセイコンサルタント株式会社[2]	

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様 個人95名、2法人・団体

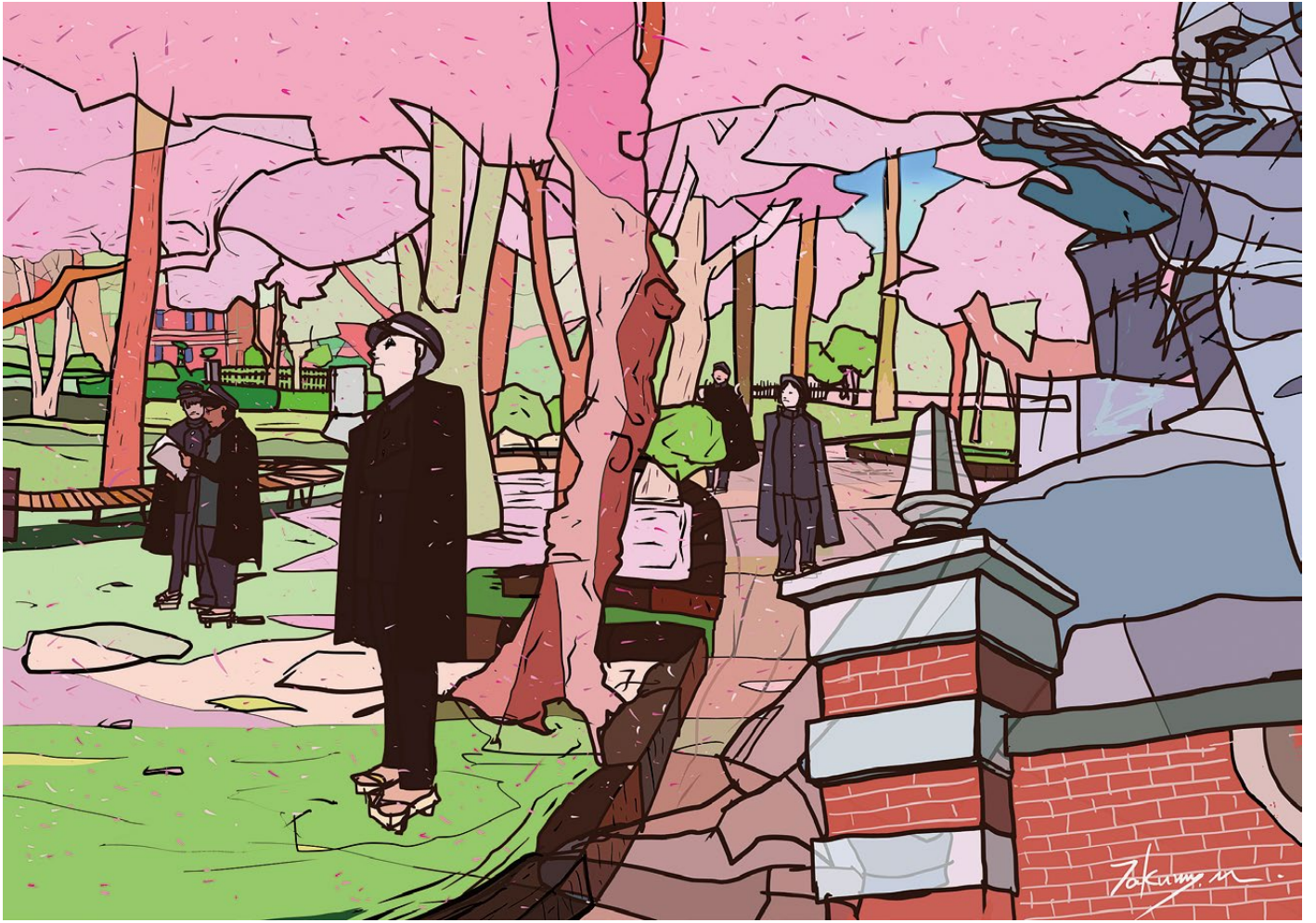
基金の取り組み事項については、基金ウェブサイトに掲載しております。

熊本大学基金ウェブサイト

URL <https://kikin.jimu.kumamoto-u.ac.jp/>

熊本大学基金





キャンパス
ミュージアム散策

絵・文／松永 拓己

大学院教育学研究科
教授・芸術家

創造する森 時の小道

熊本大学内の小道をゆく。県道337号沿い熊本大学のランドマークの赤門をくぐると、明治の佇まいを残す樹木たちが出迎える。五高記念館は正面方向にあるはずだが、いきなり道は右曲がりとなり大回りさせられる。通称サインカーブである。東へ西へと歩き、合理的に進ませてはくれない。目的の五高の建物は木々の間からチラチラ垣間見える。さらにその正路からたくさんの小道が右へ左へ枝分かれする。急ぐ熊大生にはさぞかしもどかしい。「右さん行く?左さん行く?」正路を逸れて右の小道を歩んでみる。

五高教授であった夏目漱石の銅像に出会う。「夫レ教育ハ建国ノ基礎ニシテ……」漱石のこぼれを印した石文が目に入る。その先にはやはり五高の赤煉瓦の建物が待っている。右へ左へ大いに迷わされ、それでも面白い風景にたどり着く。まるで学問のように。それとも人生のようにか。そんな小道に哲学させられる。春は桜の木々が二重三重に折り重なり謳歌する。秋には银杏が黄色く小道を括り、楓は赤く染めてくれる。よく見ると、夏目漱石像の傍にはもうひとつ小石碑が置かれていた。

「秋はふみ吾に天下の志」漱石句

黒マントを翻し下駄を鳴らし大志を抱いた五高生「龍南健児」によく似合うことばが響く、創造の森の小道である。

※右さん左さんは、肥後弁で右へ左への意味。

五高記念館

熊本市中央区黒髪2-40-1 入場無料

Tel.096-342-2050

開館時間／10:00～16:00

(入館は15:30まで)

休館日／火曜日

※大学の都合による休館日あり

交通機関／バスをご利用の場合

「熊本大学前」下車 徒歩3分

